

第4回 ワイルド伝

日本におけるワイルド研究では、ワイルドの生涯、ワイルド伝の紹介は比較的早くから始まっていた。明治 35 年(1902)にはロバート・ハバロフ・シェラード(Robert Harborough Sherard, 1861-1943)の *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship* が出版され、明治 41 年(1908)12 月には安成貞雄「海外文壇消息」(『趣味』第 3 巻第 12 号)、翌年 3 月には岩野泡鳴「私行上から見たオスカー・ワイルド」(『趣味』第 4 巻第 3 号)によって紹介されている。

ワイルドの生涯は大正時代に入ってからアンドレ・ジイド(André Gide, 1869-1951)、アンナ・コムセ・デ・ブレモン(Anna Comtesse de Brémont)、レオナード・クレスウェル・イングルビ (Leonard Cresswell Ingleby, 1876-1923)、アルフレッド・ダグラスの 4 人のワイルド伝が次々と紹介されることになる。

(1) アンドレ・ジイド

アンドレ・ジイドは昭和 22 年(1947)にノーベル文学賞を受賞しているフランスの小説家として知られている。『背徳者』(*L'immoraliste*, 1902)、『狭き門』(*La porte étroite*, 1909)、『田園交響楽』(*La Symphonie Pastorale*, 1919)、『一粒の麦もし死なずば』(*Si le grain ne meurt*, 1919)などの作品で有名であることは周知の通りである。特に、『一粒の麦もし死なずば』ではワイルドとの出会いの部分が収録されている。ジイドとワイルドとの初対面は 1891 年 11 月 29 日のことで、ジイド 22 歳、ワイルド 37 歳であった。

日本でジイドのワイルド伝が紹介されたのは、明治 42 年(1909)6 月の『太陽』(第 15 巻第 8 号)に野口米次郎(1875-1947)が「オスカー、ワイルドの一面」として取り上げたのがおそらく最初であろう。冒頭でアンデルユ、ジイドからの翻訳とあるので、アンドレ・ジイドの *Oscar Wilde* の抄訳であることは明白である。

欧陸文壇に於けるワイルドの復活は近来の出来事だ、従つて彼に関する著書多く出版せられるを見て、仏国文士アンデルユ、ジッド彼の晩年を草して、未だ人の知らざるもの公にした、竝に翻譯する所は即ち其の一筋に、ワイルド研究者の一好材料たるを疑は無い。⁽¹⁾

日本のワイルドの研究書としてはまず第一に海外のワイルド伝記が翻訳されたことはここで取り上げておきたい。大正2年(1913)11月のジッド／和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』(春陽堂)は、日本におけるワイルド研究書の最も初期のもののひとつである。現代文藝叢書第31編として出版されたもので、本書の構成は次の通りである。

オスカア・ワイルド小傳
オスカア・ワイルド
オスカア・ワイルド著作目録
メレデイスの葬式
メレデイスと其時代
青い道化
女占方

戯曲『青い道化』と戯曲『女占方』は共にモオリス・ベアリングのものである。訳者の「序言」には次のようにある。

初め私は、ジッド氏の「オスカア・ワイルド」だけで一冊の本にする積りであつたが、餘り枚数が少ないので止むを得ず舊稿の一部を巻末に附した。勿論私の本意ではない。⁽²⁾

大正2年(1913)にジッド／和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』は単行本

として出版された。これまで日本で紹介されたワイルド伝は伝記上興味深いエピソードの部分的な紹介であったが、アンドレ・ジイドの回想録はかなりまとまったものである。

オスカア・ワイルドの晩年の生活が最も好く描かれてあるとの評のある佛蘭西人アンドレ・ジイド氏の「オスカア・ワイルド」は、千九百二年六月発行の月刊雑誌 *L'Ermitage* に掲載せられたものである。其後多少の訂正加へてジイド氏の評論集 *Prétexts* 中に収められた。私の翻譯はそれをスチアアト・メエソン氏が英譯したもの、重譯である。⁽³⁾

スチュアート・メイソンの英訳本は明治 38 年(1905)に出版された。ジイドは明治 24 年(1891)11 月 29 日にパリで初めてワイルドに会い、明治 33 年(1900)11 月 30 日にワイルドが亡くなった時は葬儀に参列することができず、ワイルドに捧げたのが“Oscar Wilde: In Memoriam”なのである。

ジイドはワイルドに最初に会った時の印象を次のように書いている。Mason 訳、Frechtman 訳、和気訳の順で紹介しておきたい。

His manner and appearance were triumphant. ... all London was soon to rush to see his plays. He was rich, he was great, he was handsome, he was loaded with happiness and honours. ⁽⁴⁾

His gesture, his look triumphed. His success was so certain that it seemed that it preceded Wilde and that all he needed do was go forward to meet it. His books astonished, charmed. His plays were to be the talk of London. He was rich; he was tall; he was handsome; laden with good fortune and honors. ⁽⁵⁾

彼の態度が容貌は揚々たるものであつた。彼の成功の確實な事は常に彼に

先立ちて歩み彼は誰それを目當に進んで行けばよかつたのであつた。彼の著書は驚嘆と歓喜とを以て歓迎せられてゐた。間もなく倫敦は挙つて彼の芝居を見るべく狂奔した。彼は富を有してゐた。彼は偉大を有してゐた。彼は秀麗であつた。彼は幸福と名誉とを其双肩に荷つてゐた。⁽⁶⁾

ジイドの『オスカア・ワイルド』は、昭和に入ると『アンドレ・ジイド文芸評論』や『アンドレ・ジイド全集』などの全集に積極的に収録された。また、ワイルドとの出会いの部分は、『*Si le grain ne meurt*』に再録され、日本では『一粒の麦若ししなずば』の題名で翻訳されている。

(2) アンナ・コムセ・デ・ブレモン

アンナ・コムセ・デ・ブレモンはワイルドの母ジェイン・フランセスカ・スペランザ・エルジー・ワイルド (Jane Francesca Speranza Elgee Wilde, 1821-1896)の友人で、ワイルドの最期に立ち会った人物のひとりである。

ブレモン伯爵夫人の *Oscar Wilde and His Mother: Memoir* (1911) は、大正元年(1912)8月の小沢愛圀「巴里の客死——Anna Comtesse de Brémontの『オスカー・ワイルド追想録』より」(『三田文学』第3巻第8号)や大正2年(1913)2月の小沢愛圀「その秋のおもひで——あめりかの作家 Anna Comtesse de Brémontの『オスカー・ワイルド追想録』より」(『雄辨』第4巻第2号)、大正6年(1917)7月の本間久雄訳「ワイルドの追懐記」(『早稲田文学』第140号)で紹介された。小沢愛圀「その秋のおもひで——あめりかの作家 Anna Comtesse de Brémontの『オスカー・ワイルド追想録』より」と本間久雄訳「本間久雄訳「ワイルドの追懐記」ほほほ同じ箇所を取り上げている。それぞれ原文の“BOOK III CHAPTER III”以降である。これは全体の後半の部分である。冒頭部分の原文と翻訳を紹介しておく。

THE autumn of the year of the great Paris Exhibition I passed in Paris in order to explore its wonders at my leisure. ⁽⁷⁾

大博覧会が巴里に開かれた年のことでした。妾はその壯觀を見物する傍ら、何かめづらしいものをあさらうと希ふ心の熄みがたい折からでしたから、恰度好い間暇を得たのを幸ひに、その年の秋を彼の都に過ごしたのでした。(小沢訳)⁽⁸⁾

巴里大博覧会のあつた年の秋、私はそれを見物する便義上、巴里に宿をとりました。(本間訳)⁽⁹⁾

本間は譯者の附記として次のように記している。

以上はワイルドの母の親友であるブレモン伯爵夫人のアンナといふ婦人の著にかゝる『オスカア・ワイルド』の中の一節を抄譯したものであります。落泊時代のワイルドの一面を知るには可なりに面白いものであると思はれます。⁽¹⁰⁾

同じ箇所を紹介しているが、かなりの差があることも興味深いところである。

ブレモン伯爵夫人の *Oscar Wilde and His Mother: Memoir* (1911) については、Karl Beckson の *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998) では特に取り上げられていない。平井博の「参考文献書誌」には、「著者は Wilde ならびにその母の親しい友人だったので、Wilde 一家に関して女性らしいこまやかな思い出の記である」⁽¹¹⁾ と紹介されている。

ワイルドの母ジェイン・フランセスカ・スペランザ・エルジー・ワイルドについては、Horace Wyndham の *Speranza: A Biography of Lady Wilde* (1951)、Eric Lambert の *Mad With Much Heart: A Life of the Parents of Oscar Wilde* (1967)、Terence de Vere White の *The Parents of Oscar Wilde* (1967)、Joy Melville の *Mother of Oscar: The Life of Jane Francesca Wilde* (1994) 等の研究書が出版されていることを紹介しておきたい。

(3) レオナード・クレスウエル・イングルビ

レオナード・クレスウエル・イングルビの *Oscar Wilde: Some Reminiscences* (1912) は同著者の *Oscar Wilde* (1907) の伝記の部分の補遺として、かなり詳しい事情なども取り上げられたものである。⁽¹²⁾

Oscar Wilde: Some Reminiscences (1912) の内容を紹介しておきたい。

CHAPTER 1

Personality of Wilde—Ancestry—the Aesthetic Period—Estimate of the Poet by Mr. Labouche—Dr. Max Nordau’s criticism—Imaginary and real interviews in *Punch*—Personal habits—The Poet in Paris

CHAPTER 2

Conversation in Paris — French writer’s impressions — Henri de Régnier—Verbal duel between Wilde and Whistler—Mr. Cottford Dick’s Reminiscences—Production of “Lady Windermere’s Fan” — Mr. Clement Scott’s criticism

CHAPTER 3

Arrest of Wilde—Account of Life at Holloway—Mr. Sherard quoted—Publication of “De Profundis” —Criticism of Professor Hugh Walker

CHAPTER 4

Residence in Dieppe—Last days in Paris Jewish author’s impressions — Account of Wilde’s death quoted from *La Revue Blanche* — Impressionistic poem descriptive of Wilde’s discourse—Hotel in which the Poet died

CHAPTER 5

Constance Wilde—Attitude of Wilde towards his Wife—House in Tite Street—Recollections of Willy Wilde and Gus Moore—Friendship of Poet for Charles Conder—Kindness of Leonard Smithers to Wilde; their last days in Paris

大正2年(1913)10月の竹内逸訳「獄中のワイルド」(『仮面』第9号)、大正3年(1914)1月の木村荘五「オスカア・ワイルドの回想」(『三田文学』第5巻第1号)、同年の石井香夢訳「ワイルドの獄中生活」(『かなりや』第6号)でも紹介されている。なお、Thomas A. Mikolyzkによれば次のように解説されている。

The original edition of this collection of personal “impressions” of Wilde is difficult to locate. Ingleby intended to fill in the gaps left by Sherard’s biography of Wilde, relying on personal accounts by lesser-known friends such as Charles Conder and Leonard Smithers. Unfortunately, none of Ingleby’s material is documented, so much of what he claims must be taken on faith. ⁽¹³⁾

(4) アルフレッド・ダグラス

アルフレッド・ダグラスはワイルドの生涯を考える上で、また、特に *De Profundis* を考える上で、重要な存在である。特に、アーサー・ランサム の *Oscar Wilde: A Critical Study* (1912) の出版後、ダグラスとの間に裁判沙汰にまでになった事情もある。*Oscar Wilde and Myself* は当然ダグラス自身が執筆していることから、ワイルドとの関係についてはダグラスの立場の内容となる。本書はこれまで翻訳がないだけに、矢口達の試みは文献的にも貴重である。翻訳されている箇所は以下の通りです。

緒言

- 第1章 オックスフォード
- 第2章 喪はれし幻影
- 第3章 社交界に於けるワイルド
- 第4章 言語の王

ちなみに原文の目次は以下の通りである。

INTRODUCTION

- CHAPTER I OXFORD
- CHAPTER II LOST ILLUSIONS
- CHAPTER III WILDE IN SOCIETY
- CHAPTER IV THE LORD OF LANGUAGE
- CHAPTER V OUR MUTUAL FRIENDS
- CHAPTER VI LORD QUEENSBERRY INTERVENES
- CHAPTER VII THE WILDE TRIALS
- CHAPTER VIII HARD LABOUR AND AFTER
- CHAPTER IX NAPLES AND PARIS
- CHAPTER X THE “BALLAD OF READING GAOL”
- CHAPTER XI THE TRUTH ABOUT “DE PROFUNDIS”
- CHAPTER XII MY LETTERS TO WILDE
- CHAPTER XIII MY LETTERS TO LABOURCHERE
- CHAPTER XIV THE ARTICLE IN THE “REVUE BLANCHE”
- CHAPTER XV FIFTEEN YEARS OF PERSECUTION
- CHAPTER XVI WILDE’S POETRY
- CHAPTER XVII THE PLAYS AND PROSE WORKS
- CHAPTER XVIII FOR POSTERITY
- CHAPTER XIX THE BRITISH MUSEUM AND “DE PROFUNDIS”
- CHAPTER XX RANSOME’S “CRITICAL STUDY”

CHAPTER XXI	MY ACTIONS FOR LIBEL
CHAPTER XXII	“THE PICTURE OF DORIAN GRAY”
CHAPTER XXIII	LITERATURE AND VICE
CHAPTER XXIV	CROSLAND AND “THE FIRST STONE”
CHAPTER XXV	A CHALLENGE TO MR.ROSS
CHAPTER XXVI	WILDE IN RUSSIA, FRANCE AND GERMANY
CHAPTER XXVII	THE SMALLER FRY
CHAPTER XXVIII	TO BE DONE WITH IT ALL
INDEX	

ワイルドは *De Profundis* の中で人生の転機について次のように述べている。

... the two great turning-points of my life were when my father sent me to Oxford; and when society sent me to prison. ⁽¹⁴⁾

こうしたことから、ダグラスはワイルドの人生の大転換に大きくかかわっていたことになる。

Oscar Wilde and Myself (1914) は大正4年3月～5月(1915)の矢口達訳「オスカア・ワイルドの自分」(『仮面』第26巻～第28巻)など次々と紹介された。しかし、一部の抄訳とは言え、矢口達訳「オスカア・ワイルドの自分」が現在までのところ、最もまとまった紹介であるだけに貴重な業績である。

(5) その他

オスカー・ワイルドの生涯をまとめたものとしては、大正3年(1914)9月の貴志二彦『ワイルドの二重人格』(梁江堂書店・杉本梁江堂)、大正4年(1915)7月の大日本文明協会『近世泰西英傑傳』(第2巻、文明書院)、大正8年(1919)12月の西宮藤朝『近代十八文豪と其生活』(新潮社)、大正9年(1920)

3月の本間久雄「オスカア・ワイルド（近代文豪傳）」（『文章倶楽部』第5巻第3号）、大正9年(1920)3月の本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」（矢口達編『ワイルド全集』第1号、天佑社）があるが、貴志二彦『ワイルドの二重人格』と本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」は後述するので、ここでは大日本文明協会『近世泰西英傑傳』と西宮藤朝『近代十八文豪と其生活』を取り上げておきたい。

大正4年(1915)7月の大日本文明協会『近世泰西英傑傳』（第2巻、文明書院）には「第十五章 オスカー・ワイルド」（pp.501-539）が収載されている。その内容はさらに以下の通りである。

- 一 小傳
- 二 著作
- 三 「ウィンダミーア夫人の扇」
- 四 「熱心の大切」
- 五 「サロメ」
- 六 警句

ここでは特に「一 小傳」について注目しておきたい。

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde 一八五四—一九〇〇年)の名、一度我國讀書界に喧傳せらるゝに到りしより、其奇矯なる思想と逸調の行為とは、諸文士の争うて傳ふる所となりしが、未だ彼の一生の事歴を秩序的に紹介せしものあるを聞かず、蓋し彼の自傳とも稱せらるべきものは、其故國に於て秘密出版に属するものにして、彼が一生の関歴を叙せしものは、唯シェラード(R.Sherard)の「ワイルド傳」の人口に膾炙するものあるのみ。次に抄出する所のものは、欧米の著書及び雑誌に散見せし所のものなるが、是等を綜合して華奢にして面も数奇を極めし彼の一生を叙違すべし。⁽¹⁵⁾

その後の説明の中でラスキンから影響を受けたことは紹介されているものの、ペイター、マファフィ、ホイッスラー等の名前は出て来ない。

大正 8 年(1919)12 月の西宮藤朝『近代十八文豪と其生活』（新潮社）に収録されている「ワイルド」(pp.88-102)の内容は以下の通りである。

- 一 彼の生い立ち
- 二 彼の唯美主義的生活
- 三 彼の芸術観
- 四 彼の作品
- 五 彼の入獄から死に至る迄

本書ではあまり生涯については触れられていない。ラスキンについては言及されているものの、ペイター、マファフィ、ホイッスラーの名前については全く触れられていない。むしろ内容的には母親からの影響については大きく取り上げている。

彼の母が女流文学者であつたわけ、彼も亦夙に文学上の嗜好を持ち、大学在学の時代には、詩も作り、文学的運動にも左祖するといふ風であつた。例へば當時盛んに勃興して来た唯美主義の運動たるラファエル前派の主張傾向に共鳴に感じ、其の主張を體して裝飾美術を蒐集し、自らの生活にさうした空気を作つたりなどした。⁽¹⁶⁾

大正 9 年 (1920) 3 月の本間久雄「オスカア・ワイルド (近代文豪傳)」(『文章倶楽部』第 5 卷第 3 号) では、ラスキン、ペイター、マファフィ、ホイッスラーの名前については全く触れられていない。ここでは、「唯美主義」に関する記述を紹介しておきたい。

唯美主義といふのは英語でエッセティーズムと云つて、この日本語の譯字が示してゐる通り、美至上主義絶対主義であります。藝術論上で「藝術のための藝術」といふが即ちこれであります。従つてこれを生活態度として見るときには一種の快樂主義となります。(17)

本間がワイルド論を展開させる時に快樂主義という言葉が見られるのは、こうした背景があるからであろう。

まとめ

日本のワイルド研究者もワイルドの生涯についてまとめている。比較的まとめたものとしては大正9年(1920)3月の矢口達編『ワイルド全集』(第1巻、天佑社)の本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」は最もまとまっているものである。アーサー・ランサムの *Oscar Wilde: A Critical Study* (1912) が他のワイルド伝に比べると紹介されているものが一見少ないように見える。これは本間久雄が指摘しているように、様々なワイルド伝により内容が異なっているなどの相違点がその要因ではないだろうか。自叙伝(*autobiography*)と伝記(*biography*)による内容の違い、また伝記であっても人間関係によりその内容も異なって来る。しかし、ワイルドの死後、10数年の間に様々な伝記や回想録が発表されたことは、ワイルドの影響力の大きさを示すものであろう。

参考資料

河上徹太郎「ジイドとワイルド」(『作品』第2巻第9号～第11号, 1931年9月～10月)

高樹一郎「ジイドとワイルド」(『社会』第4巻第11号, 1935年12月)

平井博「André Gide と Oscar Wilde」(『オスカー・ワイルド考』松柏社, 1980年7月)

野口米次郎『野口米次郎選集』（3 海外文学・評論）（クレス出版，1998年7月）

山内昶『ジッドの秘められた愛と性』（筑摩書房，1999年12月）

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯，2001年6月）

注

- (1) 野口米次郎「オスカー、ワイルドの一面」（『太陽』第15巻第8号、1909年6月），p.118.
- (2) ジイド／和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』（春陽堂、1913年11月），p.16.
- (3) ジイド／和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』，p.15.
- (4) Karl Beckson. *The Oscar Wilde Encyclopedia*. New York: AMS Press, 1998, p.109.
- (5) Andre Gide. Bernard Frechtman, translator. *Oscar Wilde: In Memeoriam* (New York: Philosophical Library, 1949), p.1.
- (6) ジイド／和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』，p.40.
- (7) Anna Comtesse de Brémont. *Oscar Wilde and His Mother* (London: Everett & Co. Ltd., 1914), p.176.
- (8) 小沢愛圀「その秋のおもひでーあめりかの作家 Anna Comtesse de Brémont の『オスカー・ワイルド追想録』より」（『雄辨』第4巻第2号、1913年2月），p.151.
- (9) 本間久雄訳「ワイルドの追懐記」（『早稲田文学』第140号、1917年7月），p.155.
- (10) Ibid., p.165
- (11) 平井博『オスカー・ワイルドの生涯』（松柏社、1960年4月）、p.307.
- (12) Ibid., p.303
- (13) Thomas A. Mikolyzk, compiler. *Oscar Wilde: An Annotated*

Bibliography (Westprt: Greenwood Press, 1993), p.69.

(14) *Complete Works of Oscar Wilde* (Harper & Row, 1989), p.915.

(15) 大日本文明協会『近世泰西英傑傳』(第2巻、文明書院、1915年7月)、
p.501.

(16) 西宮藤朝『近代十八文豪と其生活』(新潮社、1919年12月)、pp.88-89.

(17) 本間久雄「オスカア・ワイルド(近代文豪傳)」(『文章倶楽部』第5巻
第3号、1920年3月)、p.14.